



こころを育む
総合フォーラム



こころを育む総合フォーラム
2023年度活動報告書

公益財団法人 パナソニック教育財団

こころを育む 総合フォーラム より



「こころを育む総合フォーラム」は、日本人のこころの荒廃に危機感を抱き、それにはどめをかけたいたいとの思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。日本人のこころのありようについて討議を重ねた結果、2007年に未来を担う子どもたちのためにできることを提言にまとめました。提言では、家庭・学校・地域・企業のそれぞれの立場から子どもたちのこころを育むためにできることを「問い」のメッセージとして呼びかけています。

2008年、この提言内容を全国にムーブメントとして広げていくことを目的に、子どもたちの“こころを育む活動”を応援する全国運動を始めました。毎年、全国各地で取り組まれている際立った“こころを育む活動”を募集・表彰し、広く紹介しています。

2019年、鷺田清一を座長に新たな体制で第二期をスタート。自薦に加え、推薦での応募もできるようにすることで、より多くの活動に光があたるようにしました。

本書が“こころを育む”環境づくりのための取り組みのヒントになり、活動の輪がさらに広まるきっかけとなれば幸いです。

活動の経緯

- 2005年 「こころを育む総合フォーラム」発足
学界、経済界をはじめ各界を代表する16名のメンバーで発足
- 2007年 「提言書」を発表
- 2008年 全国キャラバン、子どもたちの“こころを育む活動”の募集・表彰を開始
- 2011年 トヨタ財団・パナソニック教育財団「東日本大震災支援共同プロジェクト」
- 2013年 特別対談企画「日本人としての教養～次世代に継承したいこと」
(東洋経済オンラインとの共同企画)
- 2015年 フォーラム活動10年特別シンポジウム開催
- 2017年 全国運動10年記念表彰式開催
- 2019年 「第二期 こころを育む総合フォーラム」をスタート
鷺田清一座長を中心に新たなメンバー11名でスタート

提言書

家庭・学校・地域・企業の4つの分野で、子どもたちのこころの育みのために大人たちができることを、自己の内心に向かって問いかける「七つの問い」の形で呼びかけています。

具体的には、家庭に向けて「親（保護者）の姿勢が、子どものこころを創っているという自覚があるだろうか」、学校に向けては「教師は、一人ひとりの子どもに自信をもたせる努力をしているだろうか」など、4分野それぞれに対して「七つの問い」を提案しています。

提言書の詳細は、「こころを育む総合フォーラム」ホームページでご覧いただけます。

<https://www.pef.or.jp/kokoro-forum/phase1/message/>



フォーラムの目指す姿

家庭・学校・地域・企業などで取り組まれている「子どもたちの“こころを育む活動”」を通して、子供たちに持ってほしい“3つのこころ”をバランスよく育むことを目指しています。



こころを育む総合フォーラムメンバー



座長

鷺田 清一
大阪大学 名誉教授



入江 杏
文筆家、「ミシユカの森」主宰、
上智大学グリーンケア研究所
非常勤講師



小国 綾子
毎日新聞
ジャーナリスト



工藤 啓
認定NPO法人育て上げネット
理事長



玄田 有史
東京大学
社会科学研究所長



鈴木 みゆき
國學院大學
人間開発学部
子ども支援学科教授



高際 伊都子
渋谷教育学園
渋谷中学高等学校
校長



福田 里香
パソニックホールディングス株式会社
企業市民活動担当室
アドバイザー



増田 明美
スポーツジャーナリスト、
大阪芸術大学 教授



山極 壽一
総合地球環境学
研究所 所長、
前京都大学総長

2023年度 子どもたちの“こころを育む活動”表彰式



2024年2月9日、霞山会館（東京・霞が関）にて2023年度「子どもたちの“こころを育む活動”表彰式」を開催しました。

16回を迎えた今回の募集には、全国から198件のご応募をいただき、書類選考、現地調査などの厳正な審査の結果、高い評価を得た8団体を表彰いたしました。

全国からご来場された参加団体の方々やフォーラムメンバーなど約40名が一同に会した表彰式では、受賞された皆様の晴ればれとした笑顔が印象的でした。その受賞の言葉からは、活動への情熱と日々の懸命な取り組みが伝わってきました。

ここでは、表彰式から交流会までの活気あふれる様子についてご紹介いたします。

ご挨拶

小野理事長からは、50周年を迎えたことへのご支援に対して感謝が伝えられるとともに、各団体の素晴らしい活動内容に期待して、次のような言葉が贈られました。「選出されたのは、いずれも個性的で心温まる、素晴らしい活動ばかりです。世界では戦争が起きておりますが、このような活動が広がり、子どもも大人もこころが豊かになって明るい未来が築かれることを願います」

来賓代表の文部科学省大臣官房審議官 総合教育政策局担当の八木氏からは「子どもたちには、自分の良さや可能性を認識するとともに他者を尊重し、多様な人々と共働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の担い手になる力を身に付けていくことが求められています」と昨今の社会環境における子どもたちへの期待感が語られました。さらに「少子化や核家族化、デジタル化が進む中、子どもたちのこころを育む皆様の実践は、今後さらに重要なものになると考え、受賞を機に活動が一層発展することを祈念しております」との温かいご祝辞をいただきました。



主催者挨拶
パナソニック教育財団 理事長
小野 元之氏



来賓ご挨拶
文部科学省 総合教育政策局
社会教育振興総括官 八木 和広氏

各賞の発表・表彰

各団体の活動を動画で紹介後、特別賞、優秀賞、全国大賞の順に受賞団体が発表され、受賞者からは、喜びの声や目標が伝えられました。

全国大賞を受賞した横浜市立南吉田小学校の金子校長は、感謝の言葉に続けて「今年度も4月から2月までに50人を超える外国籍等児童が転入し、子どもたちは明るく優しく、常にウェルカムな雰囲気を持って接しています」と子どもたちの近況を報告。また、「日本の未来モデルになることを予感させる」との評価に対し、「日本でも外国籍の子どもが増えるなか、日々、必死で学級活動を続けた経験が、少しでもお役に立てれば幸いです。受賞をステップに、活動を次につなげていきたいと思っています」と継続への決意が語られました。

表彰式を締めくくる記念写真では、受賞された皆様の晴れやかな笑顔が並びました。日々の苦労や見えない努力が評価されることで、継続の励みとなり、ますます発展していくことが期待されています。



横浜市立南吉田小学校
校長 金子 正人氏(右)と
主幹教諭 外山 英理氏(左)

祝辞

子どもたちの「こころを育む活動」の募集要項にある「これも教育?あれも教育?」というキャッチフレーズの理解につながるお話を少しさせていただきたいと思います。

私は、朝日新聞の「折々のことば」というコラムで、こころに残ったさまざまな方の言葉を9年前から毎日ご紹介しています。今までで一番短いのは、小説家である田辺聖子さんのエッセイから引用した「ほな」という言葉です。田辺聖子さんが「臨終の時に、夫婦の今生の分かれの言葉としては、いろんなことがあったけれども、こころを平らにして『ほな』と言って分かれるのが一番いいですよ」とおっしゃったとき、いい言葉やなと思いました。いざという時に言えるように、普段から言う練習をしています。

もう一つご紹介したいのは、ある高校生の「ふーん」という言葉です。これは、子どもたちが発する言葉の中で、ある意味で一番好きな言葉です。

言葉を口にしたのは、私が京都の高校で講演をした際に1年以上学校を休んでいたのに1000人以上の前で最初に質問した子です。学校の先生方に事情を確認し、当時、アーティストの方とやっていた私塾にも参加してもらいました。塾では、最近あった面白いことや、携帯で撮影した写真について話すのですが、その子は話に乗らずに「ふーん」と言うだけ。目を輝かさなくても、ふてくされずに無表情で「ふーん」と言う。その時、この子は今、充電中で、この充電がすごく大事なことだと思ったんです。彼女に必要なのは、学校のようにすぐ答えを求めたり、期待したりせず、放っておいてくれるけれど、大事にしてもらっていると感ぜられる場所があることだと思いました。子どもたちの「こころを育む活動」の募集要項にある「これも教育?あれも教育?」のキャッチフレーズは、すぐに答えを求める学校的な場所の外側に、このような場所を作る活動を表現しており、そのような活動をなさっている方を見つけて表彰し、活動を広め、参加者を増やしていくことが、子どもたちのこころを育む活動の趣旨だと理解しています。今年も良い活動に触れられて嬉しく思います。本日は、おめでとうございました。



座長 鷺田清一氏(大阪大学名誉教授)

交流会



団体同士の情報交換や
フォーラムメンバーとの
交流により、
活気に満ちたひと時に



▲乾杯のご発声
は、フォーラムメン
バーの福田里香氏



◀6年生作の南
吉田小マスコット
「MYワールドくん」
を手に語る外山英
理氏



◀会場には、受賞
団体の紹介パネル
や資料を展示



▶置賜農業高校の生
徒が食育紙芝居の台
詞を披露し、盛り上
がる会場の様子



受賞団体 活動紹介

全国
大賞

横浜市立南吉田小学校【神奈川県】

国籍を超えて笑顔で結びつなげよう南吉田

選考
理由

児童会の多彩かつエネルギッシュな創意工夫が周囲の大人たちを巻き込み、子どもたちも楽しんでいる点が高く評価されました。多様な文化を理解し合うためのこの活動は、今後の日本の未来モデルとなり得ることを予感させます。



活動の概要と目的

いろいろな国籍の子どもたちが心地よく過ごせる学校づくりを児童会が中心となって展開しています。

自分や家族が外国籍である子どもが全校の54%を占め、22の国や地域につながる子どもたちが学ぶ南吉田小学校では、児童会を中心に言葉や文化の違いを超えて互いに認め合う学校づくりが展開されています。

児童会では「笑顔で結びつなげよう南吉田」を合言葉に、〈国際読書会〉や〈多言語あいさつ運動〉〈民族衣装の聖火リレーで始まる運動会〉など、さまざまな取り組みを実施。5・6年生による11の委員会で構成された児童会は、4年生以上のクラス代表も含めた代表委員会で合言葉の実現について話し合い、全校へ展開しています。活動を通して多様性を尊重し、困っている人に手を差し伸べる思いやりのところが全校で育まれており、個々の表現力や積極性も培われています。

見守る先生たちは、良かった点を積極的に褒め、困ったら支援するよう心がけています。また、行政や地域団体に講師を派遣してもらい、言葉や生活、出身国の文化の継承など、幅広くサポートしています。



あいさつ運動では、さまざまな国旗とあいさつを書いた紙を掲げたり、給食時の放送であいさつが良かった人を紹介したりと、委員が工夫して取り組んでいます。



合言葉を表した地球のイラストと35の年間目標が掲げられたエントランスで、笑顔を見せる児童会メンバー。お知らせなどは、多言語で掲示されています。

子どもたちの 変化・成長



「笑顔で結びつなげよう南吉田」の合言葉を実現しようと工夫や努力をするなかで、先輩の姿を見て人前で話せるようになったり、役割に立候補したりと成長が見られます。児童会の活動により、困っている子に手を差し伸べる行動が全校児童に根付いており、校風になっています。

参加者の声

いろいろな国の子どもたちに会い、その国の文化や言葉を当たり前で学べるところが南吉田のいいところです。

(5・6年生／児童運営委員)

練習を重ねて話をまとめられるようになり、人のことを分かろうとするようになりました。

(5・6年生／児童運営委員)

読み聞かせは緊張した。いろいろな国の言葉で聞けて勉強になったし、その国を知ることができてうれしかった。(5年生／図書委員)

あいさつを自分からしてくれる人が増えました！あいさつを増やしてすてきな学校にしたいです！

(5・6年生／あいさつ運動の運営委員)

イラストレーターになるのが夢なので、絵で南吉田の経験や「平和・平等」について伝えていけたらと思います。(5年生／クラス代表)

運動会では1、2年生のお世話をがんばりました。6年生で協力して盛り上げることができてよかったです。(6年生／運動会サポータープロジェクト委員)

今後の課題と 未来の方向性

日本人と外国人の共生は、地域社会の課題となっています。社会の縮図でもある学校が、保護者・地域・行政等と連携して多様性を尊重できる子どもの育成事例を発信し、多文化共生の学校づくりや地域づくりに貢献していきたいと考えています。今後も工夫を凝らし、子どもたちのアイデアを引き出しながら活動を継続することで、日本はもとより外国籍の子どもたちも、将来の社会を担う大切な人材になると期待されます。

活動の特長

外国籍などの子どもが5割を超え、児童会でも多国籍交流を支援

南吉田小学校周辺は、中華街で働く方をはじめとして外国人が多く住む地域であり、小学校には自分や家族が外国籍である児童が多い特色があります。2010年代には外国籍等児童が全校の50%に増加したため、児童会においてもさまざまな方法で多国籍交流の支援を開始。2019年に決まった合言葉のもと、笑顔で国籍を超えた交流を図る児童会の活動は、次第にブラッシュアップされて現在の形になっています。

言葉や文化の違いを学び、助け合う校風を誇りに成長

子どもたちは、国籍の違う子がいるのが当たり前環境のなかで、児童会を主体的に運営しており、みんなが国籍や文化の違いを超えてつながるために何が必要かを、個々の役割や視点から考えて活動しています。意見を堂々と発表する活発な6年生の姿は下級生の憧れであり、自主性や積極性など、個々の成長を後押ししています。活動により全校に根付いた助け合う校風を誇りとし、愛校心が育まれています。

多彩なつながりが、国籍を超えた絆を生み出す

児童会の活動と、学校・行政・地域交流団体のさまざまな取り組みが網目のようにつながり、子どもたちの不安や戸惑いを受け止めています。基盤には、学校と行政が連携し、日本語を話せない子ども段階を踏んで丁寧に指導する「誰一人取り残さない」姿勢の取り組みがあります。さらに児童会とともに、ペア学年、ペア学級で縦の交流を深めながら、困りごとや不安をフォローしています。



6年生の実行委員が活躍する運動会は、6か国語の案内で始まります。民族衣装で行う聖火リレーは見応え十分です。



代表委員会で、学校を言葉の花束で飾る「マイフラワー運動」について話し合う様子です。素敵な言葉が集まりました。

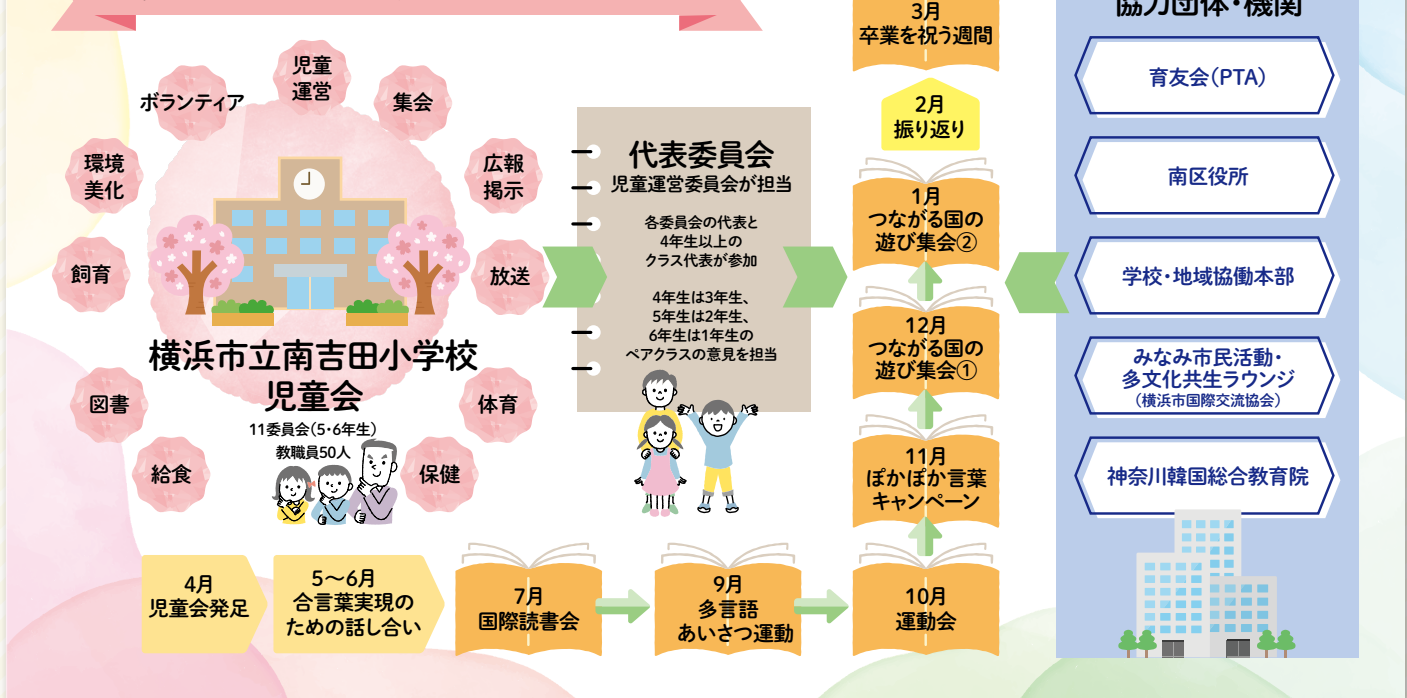


図書委員が担当する国際読書会では、外国人講師を招いて多言語での読み聞かせが行われています。

活動の広がり

創立118年目を迎える同校では、2010年代から外国籍などの児童が急激に増え、2019年から児童会でも合言葉を掲げて多国籍交流を推進しています。行政や地域団体が派遣する各国の講師やボランティアと日本語教師の資格を持つ教員などにより、日本語が話せなくても学校生活になじめる細やかなサポートを続けてきました。児童会の取り組みは全校に浸透し、思いやる姿勢は代々受け継がれています。

国籍を超えて笑顔で結びつなげよう南吉田



連絡先

- 所在地: 〒232-0022 神奈川県横浜市南区高根町2-14 ●TEL: 045-231-8082
- E-mail: er00-toyama@city.yokohama.jp ●ホームページ: <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minamiyoshida/>
- 代表者: 金子 正人 (校長) ●担当者: 外山 英理 (主幹教諭)

優秀賞

NPO法人 にのこ秋田 多機能型ケアベースにのこ【秋田県】

「にのこ商店」～笑顔は続くよどこまでも～

選考理由

社会との接点が少ない重度障がいの子もたちが、地域の人たちとの交流を通して社会性や自己有用性を育てている点が評価されました。地域の人たちがこのような子どもたちと接点を持つことが、より豊かな社会をつくることを示す好事例と言えます。



活動の概要と目的

自分たちや家族が作ったものを販売し、地域での交流を楽しんでいます。

「にのこ」は、重症心身障がい児者、医療的ケア児者（呼吸が難しいなど、日常的に医療行為が必要な児童）のためのデイサービス施設です。デイサービスは月曜から土曜まで。月2回ですが、金曜から土曜に一泊二日で短期入所を実施しています。未就学児対象の児童発達支援も2023年から加わりました。1日当たり平均6～8人を受け入れています。

毎年秋に、フリーマーケット「にのこ商店」を開催。めんこさん（施設の利用者さんのことを、かわいいを意味する「めんこい」から、めんこさんと呼んでいます）たちが売り子になって、自分たちや家族（母親や祖母など）が作ったものを販売。いつもは「やってもらう」立場が多いめんこさんたちですが「やったよー」という誇らしい表情や、人の役に立てた！と喜ぶ姿を見せてくれます。

めんこさんの存在を知ってもらい、地域との交流をはかりたい。近所の人たちも含めて、みんなで問題を解決できることもあるのではないかな、というのが、にのこ商店のきっかけです。



普段かかわったことがないお客さんに緊張していましたが、少しずつ慣れていくことができました。めんこさんの笑顔が増え、笑顔が地域に連鎖していくことが目標。



民家を改修した旧施設の住所が2-2であったため「にのこ」と名付けました。2019年第1回の「にのこ商店」は、旧施設で開催。

子どもたちの変化・成長



初めは家族や施設スタッフ以外の人と会うことに、みんな緊張していました。ずっとうつむいて頑なだったのですが、接客を重ねるうちに、だんだん楽しそうに。ちょっとずつちょっとずつ慣れていく様子が見られました。「にのこ商店」をきっかけに、商業施設などへの外出も多くなりました。

参加者の声

怒った表情で体を突っ張らせていたのですが、慣れてくると体が緩み、穏やかに。終わる頃には笑顔も見られました。

（高校1年生の親）

普段うつむき加減なのですが、接客中はずっと顔を上げて笑顔でした。ベッドに戻ると、ぐっすり眠っていました。

（高校1年生の親）

いつもたくさんの人に介助してもらいながら生活しているので、にのこ商店で接客する姿が見られて、うれしかった。（利用者の母親）

売上を、次に出品する材料費に充てたい。どんなものが喜んでもらえるのか考えながら、とても楽しかった。

（作品提供した母親）

重症心身障がい児が地域にいることを知る機会になってよかった。自分にできることは何かないかと考えさせられた。

（70代男性）

少しずつ慣れていく様子を見ることができました。経験することが利用者さんに必要だとわかりました。

（にのこ商店リーダースタッフ）

今後の課題と未来の方向性

現在、にのこ商店の開催は、年に1回。せっかく人と触れ合うことに慣れても、翌年には、またイチから出直すことになる児童も。それでも毎年、開催して、回数を重ねて慣れていくのが目標です。ゆっくりでも、その成長をスタッフ全員で見守りたい。

活動の特長

めんこさんの存在を、地域の人知ってもらいたい。

重い障がいがある人が、地域で暮らしていることを知ってもらおうと、ミュージカル鑑賞会など、さまざまなイベントを催しています。「にのに商店」も、その一つ。近所の人たちに、めんこさんの存在を知ってもらい、地域との交流をはかりたい。にのに商店を楽しみにしてくれるようになればいいなど。にのに商店での交流を通して、気軽に遊びに来てもらえるような施設を目指します。

楽しい思い出をいっぱい作りたい。

めんこさんたちは大きな手術や、つらい治療など命にかかわるような経験をしてきています。余命を告げられているめんこさんもいます。にのにには「にのに商店」のイベントをはじめとし、クッキングやハンドベル、プラネタリウムなど、さまざまな活動をしています。5月ならば「母の日」11月には「成人する人のためのプレゼント」を制作。楽しい思い出をいっぱい作っています。

孤独になりがちな親御さんたちを応援したい。

「作っている間は日々の介護から解放され、自分の時間を過ごしているという実感があり、楽しかった」という母親の声もありました。親御さんたちは仕事を辞めなければならないなど、孤独になりがちです。また、人工呼吸器の管理や、痰の吸引、チューブによる栄養投与などで、夜ゆっくり休むことができません。そんな親御さんたちが社会に戻れるよう、にのにには短期入所の回数を増やしたり、連泊できるようにして、親御さんの負担を減らせるように取り組んでいます。



コロナ禍でリモート接客に。2020年からは、ZOOMでの開催です。22年ようやく対面での販売ができるようになりました。



言葉を発することが難しいので、うちわに「いらっしゃいませ」や「ありがとう」の文字を書いて接客しています。



ハンドメイド雑貨の部屋。2022年は天気が悪かったにもかかわらず、近所の方をはじめ60人くらいの人が来場してくれました。

活動の広がり

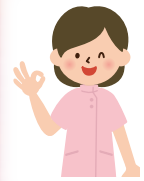
2018年4月「NPO法人にこっと秋田」を設立。10月に秋田市御野場の民家を改修し、多機能型重症児者デイサービス「にのに」を立ち上げました。当時、秋田市内には、めんこさんを対象としたデイサービスは少なく「安心して預けられる場所がないのであれば、自分たちでつくろう」と思ったのがきっかけ。23年に木材を多用した建物を現住所に新築。医療的ケア児が泊まるためのベッドを3床設けました。スタッフ10人から始めて、現在は計22人になります。

NPO法人 にこっと秋田 多機能型ケアベース「にのに」



メールで連絡
月一回訪問

嘱託医(小児科)



スタッフ22人
看護師
介護福祉士
保育士など



連携



連携



連携



ボランティア
看護師(週一回)
読み聞かせ(月一回)



活動スケジュール	
4月	開催日の決定。 スタッフの選定など
5～9月	制作活動と、めんこさんの 家族への作品依頼
10月	「にのに商店」開催

連絡先

- 所在地：〒010-0063 秋田県秋田市牛島西2丁目3-18 ●TEL：018-838-6125
- E-mail：nicotto-akita@iaa.itkeeper.ne.jp ●ホームページ：https://nicotto-akita.sakuraweb.com/
- 代表者：八代 美千子(理事長) ●担当者：村雲 理香

優秀賞

山形県立置賜農業高等学校 食愛プロジェクト【山形県】

愛の輪広がれ！ 置農生の子ども食堂活動

選考理由

食に関する社会課題に対し、試行錯誤と実践を通して地域の子どもたちに食育や自助・共助の大切さを伝えています。地域の企業や団体とつながり、地域特性を活かした食材を使うなど、地域活性化に貢献している点も評価ポイントになりました。



活動の概要と目的

子ども食堂や子ども農園、食育活動などを通し、食の大切さを地域の子どもたちに伝えます。

子ども食堂や子ども農園、食育活動などを「置農食愛プロジェクト」として行っています。

2020年より子ども食堂を開始し、計46回、2854食を提供しました。月1～2回実施。経済的困窮に苦しむひとり親世帯などの子どもたちが対象です。子ども農園の取り組みは、受け手としてだけでなく、自ら食を手に入れる「自助」の大切さを伝えたいと始めました。地産地消や、農業への理解促進を目的にしています。

紙芝居や人形劇などによる食育活動のほか、食品スーパーマーケットなどと連携し、食品の寄付を募るフードドライブ、食材を配布するフードパントリーなども行っています。

食の大切さを地域の子どもたちに伝え、社会課題でもある子どもの食格差に取り組んでいます。



500平方メートルの畑を整備し、5～11月に月1回程度開催しています。来園回数は、延べ83回に。子ども農園の利用は無料。毎回30人以上が参加しています。



自分たちが収穫したもので作ったお弁当は無料。外で食材を調達したときは1個大人200円、子ども100円などで販売。

子どもたちの変化・成長



児童だけでなく、その保護者とも会話をする機会が多く、コミュニケーション能力が高まりました。親御さんなど家族の人たちとお話することが楽しめるように。また、この活動を通して、ひとり親家庭の貧困率などにも関心をもつことができました。

参加者の声

はたけに行ったり、おべんとう作りが大好き。お兄さんやお姉さんが優しく、面白いので、休んだことはありません。

(小学3年生)

参加して4年目。食べ物を自分の手で育て、収穫し食べることは大切と学び、感謝の気持ちを持つようになりました。(中学1年生)

1年生の時に「食愛プロジェクト」を課題研究のテーマに選びました。充実感や達成感があり、選んでよかった(高校2年生)

休日の活動や発表会と多忙な高校生活で充実していました。親御さんや子どもに「ありがとう」と言われ、うれしかった。

(短大1年OG)

ジャガイモ掘りやナス・キュウリの栽培収穫は経験がなく、子どもと一緒に、楽しく貴重な経験をさせていただきました。

(保護者30代)

野菜などの食材が急騰している昨今、収穫物を分け合い、食べることは家計的にも助かります。食育にもプラスです。

(保護者30代)

今後の課題と未来の方向性

大変だったのが、夏休み中の農園管理です。夏の活動が多いのに、屋根のある場所がありません。猛暑の中、休憩をとれる場所がなかったので「つらい」という声も。今後の課題です。子ども食堂には、現在20家庭ぐらいいらっしゃるのですが、もっと増やしたい。料理を自分たちで作れば原価が下がり、今よりも安く提供できるのですが、今度は衛生面から持ち帰ることができなくなってしまう。難しいところです。

活動の特長

子ども食堂で、自助と共助を学びます。

2023年度は4月から10回開催。676食の弁当のほか、手作りのパンや菓子を提供しました。「子ども農園で収穫した農産物を活用する食事」では、野菜カレーや夏野菜弁当など、試作を重ねました。栄養士や大学生の協力の下、紅大豆ごはん、ジャガイモカレー、夏野菜のてんぷらなどを調理、自助と共助を学びました。

食を手に入れる「自助」の大切さを、子ども農園で学びます。

2022年秋から8回実施、234人の親子（子どもは4～12歳くらい）が参加しました。5月には、ナスやピーマン、キュウリやトマトを植え付け、玉ねぎやイチゴの収穫（6月）、ジャガイモの収穫体験（7月）など行いました。夏休み中は、いつでも収穫することができるため毎日訪れる子どもも。来園回数は延べ83回になりました。自宅で野菜の栽培を始めるなど、自助の効果もありました。

視聴覚教材を制作し、食育活動にも取り組みます。

食農活動として食育紙芝居や、伝統料理を紹介する人形劇を高校生たちが制作。米沢栄養大学の先生や栄養士さんに、栄養面からの指導を受けました。テーマは「好き嫌いをなくそう」「野菜の大切さ」など。子どもたちの前で演じ、子どもたちとともに学びを深めます。



食品スーパーマーケットの店舗に、食べ物の寄付を募るフードドライブのボックス設置をお願いしています。



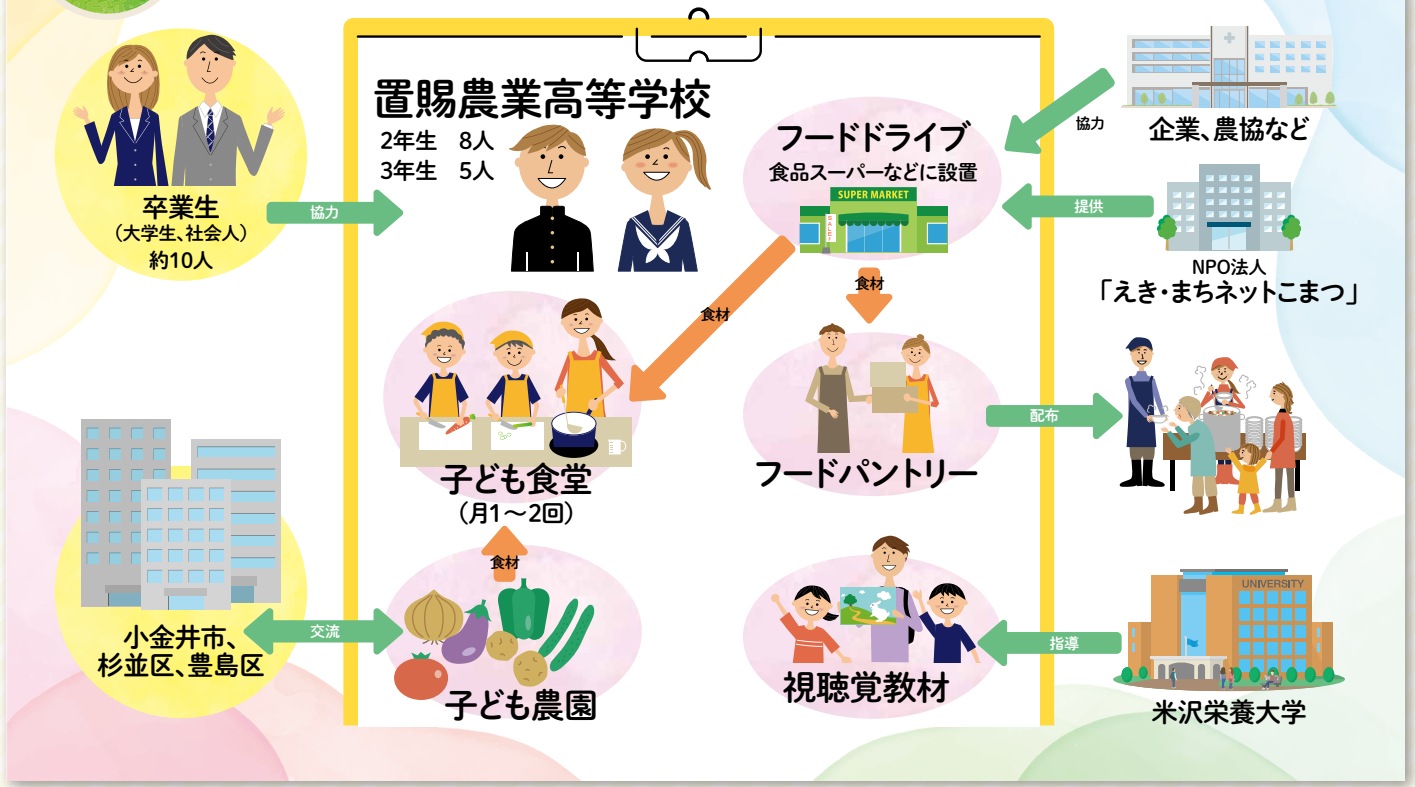
フードパントリーは週に1回。フードバンクで集まった食材を仕分けします。企業から、さくらんぼやお米などの提供も。



「ヘルシーマジシャンCOOK」という紙芝居。子ども食堂や食育教室で上演しています。

活動の広がり

2023年度より首都圏（小金井市、杉並区、豊島区）の子ども食堂との交流を始めました。都会の子どもたちにとって野菜作りは貴重な体験です。子ども農園には定員の10倍以上、子ども食堂にも100人以上の参加希望がありました。今後も町内外にある子ども食堂との連携を深めることが目標。



連絡先 ●所在地：〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松3723番地 ●TEL：0238-42-2101
 ●E-mail：emotok.jg@pref-yamagata.ed.jp
 ●代表者：平田 忠宏（校長） ●担当者：江本 一男（実習講師）

優秀賞

NPO法人 四街道プレーパークどんぐりの森【千葉県】

遊んで育つ！ ころろが動くみんなの居場所

選考理由

住宅街とは対照的な自然の環境が子どもたちを解放し、こころの成長を促しています。地元で22年間愛され、出張プレーパークや若者向けフリースペースなど、人と人がふれあう機会をより多くの子どもたちに提供している点もまた評価されました。



活動の概要と目的

野外の遊び場プレーパークを開催。 子どもたちの成長を見守ります。

都会に近い住宅地にある里山を活用したプレーパークです。地域の子
どもたちが安心して思いっきり遊んでいます。0歳から大人まで、みんな
でつくる、みんなの遊び場を長年、続けてきました。

遊びをとおし誰かに必要とされることで、自己効力感、自己肯定感を
育んでいきます。自然体験や社会体験を重ね、日々新しい発見をし、育
ち合うことが目的。自主的・自発的に遊び、社会性を育み、年齢を越え
た交流を図ります。また、四街道市内への出張プレーパークや、若者支
援事業フリースペース「ぶらっと」、里山の森林整備なども行っています。

試行錯誤を繰り返しながら、納得がいくまで挑戦できる場づくりを心
がけています。自然豊かな里山や公園での遊びの大切さと、地域全体
で子どもの成長を見守る意義を社会に伝えています。



地域の大人、子ども、若者たちが一緒に遊び場（居場所）づくりをしています。ここで育った
子たちが、やがて若者となり、自分たちの居場所について考えていきます。



ケンカをしなければ仲直りする機会もありません。子どもたちは自分たちで解決できる、
失敗しても大丈夫、リカバリーできると体験の中で実感します。

子どもたちの 変化・成長



「他の子に手を出しちゃう子は、親は遊びに連れていけな
い。けれどプレーパークならば、みんなが受け入れてもら
える」という声も。人の使っているものや三輪車などを使
いたがる子（当時3歳くらい）ですが、小学生に上がる前
には、モノを貸してあげたり、小さい子の三輪車を押し
あげたり、他の子のことも考えられるようになりました。

参加者の声

いるだけで楽しい。いつもどおりここに来
る。完成がない、っていうのが楽しい。だ
から、楽しいことに出会う。（中学3年生）

ベーゴマで仲良くなれたし、自信が持てた。
高校生になれば時間がなくなるが、続けて
いくし、ボランティアもしたい。

（中学3年生）

四街道でも自然が少なくなり 自然の中で遊
ぶことが少なくなっています。どうしたら続
けられるのか一緒に考えてほしい。

（中学生）

就職が決まり、初出勤まであわずかとなっ
た。人と会うこと、会話すること、つながり
を持つことが大切だと感じた。

（高校3年生）

兄弟でも親、先生でもない、地域のお兄さ
んとしての役割を考えるように。自分の居場
所にもなっています。（大学生ボランティア）

家に居づらい思春期でも、フリースペース
「ぶらっと」にいる時、楽しいと思える瞬間
があったらすてきだと思います。

（ブレイワーカー）

今後の課題と 未来の方向性

利用者は増えつつあるのですが、リピーターだけでなく、新たに「プレーパーク」の良さを広めたい。まだプレーパークを知らない人たちに、どう伝えて広げていくのか。一人でも多くの人に知ってもらいたいです。とにかく続ける。閉めない。安定的に体制を維持していけるよう市役所など公的機関と連携し、理解者、協力者を増やすことが目標です。プレーパーク事業が大きくなって、運営面において事務局がしっかり対応できるように努力していきたい。

活動の特長

いつ来て、いつ帰ってもいいプレーパークどんぐりの森

「自分の責任で、自由に遊ぶ」をモットーに、いろいろなことに挑戦できる野外の遊び場。自由とは「自分由来」を意味します。やりたいと思う環境をつくり、やりたい人の背中を押す。0歳から大人まで、いつ来て、いつ帰ってもいい場所です。試行錯誤を繰り返しながら、納得がいくまで挑戦できる場づくりを心がけています。

「遊びの道具と遊び心」を、プレーカーに載せて出発。

子どもたちが歩いて行ける場所に「プレーパーク」を!ということで、四街道中央公園をはじめ市内4か所に出張しています(毎週木曜日)。クルマには「遊びの道具と遊び心」が。ペーゴマ、ロープ、ハンモック、水遊びセット、たき火セット、黒板、ボール、絵具、シャボン玉、プール、木工セットなど。

中高生・若者のフリースペースぶらっと

生きづらさを感じている若者たちも安心して過ごせる居場所です。順調に社会に馴染める子ばかりではありません。ふとした時に思い出し「会いに来ることが出来る場所」としての役割を果たしています。「居心地のいい場所、自分のペースで人と出会い、交流できる場所」を目指してきました。



協力して、水路をつくっています。野外の遊び場で子どもたちは自分のやり方、自分のペースでやってみたいことをしています。



プレーカーと呼ばれる遊び道具を積んだクルマ。黒板塗料を塗っているので、自由にお絵描きできます。



ぶらっとは、毎週金曜日「やすらぎの家」で開催し、今年で5年目。思春期の悩みや学校、進路の話をする学生も。

活動の広がり

子どもたちが自然の中で、のびのび遊ぶ必要性を感じ、2001年「四街道にプレーパークをつくる会」として始まりました。最初は月に1回からスタート。当時から子どもの体験不足を心配している人が多く、80人程度が集まりました。04年に「四街道プレーパークどんぐりの森」と改称。05年には千葉県の事業に採択され、3年後の08年からは四街道市の事業として予算が付くことに。2010年からは、出張プレーパークも開始しました。

NPO法人 四街道プレーパーク どんぐりの森

有償スタッフ+ボランティア数名

大人が3人以上になるよう配置。

有償スタッフ9人から日替わりで、シフトを組みます。

委託協力



四街道市 健康こども部
子育て支援課

ボランティア



千葉明德短期大学(千葉市)、
国際医療福祉大学(成田市)ほか

活動スケジュール

和良比どんぐりの森

月曜日	10～17時
金曜日	13時半～17時
第1・第3土曜日	10時～17時

活動スケジュール

出張プレーパーク

第1木曜日	四街道中央公園	10～17時
第2木曜日	物井さくら公園	10～17時
第3木曜日	栗山小鳥の森	13時半～17時
第4木曜日	鷹の台公園	13時半～17時

連絡先

- 所在地:〒284-0044 千葉県四街道市和良比282-29 ●TEL:090-6197-6735
- E-mail: playparkdongurinomori@gmail.com ●ホームページ: <https://dongurinomori.net/>
- 代表者: 小島 成文 (代表理事) ●担当者: 関口 笑子 (事務局長)

優秀賞

NPO法人 プロジェクトサンタ【兵庫県】

ガチャガチャでワクワクする時間を届けたい

選考理由

ともすれば沈みがちになる病児たちを楽しみと勇気を与え、まわりの人たちとのコミュニケーションを活性化させている点が評価されました。社会的にも展開しやすい仕組みでもあり、今後このような活動が拡がることが期待されます。



活動の概要と目的

カプセルトイのワクワク感が治療に励む子どもたちの支えになっています。

小児病棟にカプセルトイを設置し、治療の励みになるようなワクワク体験をサポートしています。治療のご褒美として引くカプセルトイは、子どもたちのがんばる気持ちを高めるとともに、笑顔や会話を引き出し、医師や看護師、家族の負担を軽減させています。

カプセル内の景品は、病院ごとに引く回数や希望内容が違うため、補充の際にはそれぞれの意見や反応をよく聞いて用意しています。また、設置先の病院では、子どもに付き添う家族も癒される企画を実施しています。

遊園地でのチャリティーイベントや不要本の寄付などにより、参加者が気軽にカプセルトイの設置を支援できる仕組みもあり、地域の人々に自然な形でチャリティーの芽が育まれています。

2017年に団体を設立し、支援活動をスタート。現在は関西を中心に九つの病院に展開しています。「誰かのため」と気負わずに、楽しく参加した支援で誰かが助かるといった優しい連鎖を生み出しています。



病院ごとに工夫があるため、担当者の意見を聞いて景品を補充しています。補充の際に聞く子どもたちの喜ぶ姿や成長は、スタッフの励みになっています。



企業から提供された美容液を、子どもたちがこころを込めてラッピングし、いつも付き添ってくれているお母さんに贈った「母の日ギフト」の様子です。

子どもたちの変化・成長



カプセルトイをきっかけに子どもと医療スタッフとの距離が縮まり、笑顔と会話が増えています。子どもたちは、治療後に引くカプセルトイのワクワク感や楽しみに励まされ、治療に前向きに取り組むようになっており、設置場所まで行くことで、歩行や離床のきっかけにもなっています。

参加者の声

ワクワク感を持ちながらがんばれた達成感により、治療に前向きになれるエネルギーを与えてくれています。(病院スタッフ)

ガチャガチャと聞くと、手術後、笑うことが少なかった子ども笑顔を見せ、好みの景品が当たると大喜びしてくれました。

(病院スタッフ)

離床が進んでいなかった子ども、ガチャガチャを見ると自ら進んで椅子に座り、離床を促すきっかけになりました。(病院スタッフ)

ガチャガチャひけるよ!と声かけすることで、痛みを伴う治療にもグッとがんばれる子どもたちがたくさんいます。

(病院スタッフ)

緊急事態宣言による面会や行事の規制など、楽しみが減った子どもたちの唯一の楽しみになっていて、助けられました。(病院スタッフ)

薬を飲む、お風呂に入る、リハビリするなど、子どもたちの状況に合わせてがんばる力を貸してくれています。(病院スタッフ)

今後の課題と未来の方向性

活動を次世代へつなぐには、事務所を構えて社員を雇用するなど、人を循環させる仕組みが必要です。人件費確保のためにも景品代を抑えることが課題であり、景品提供やチャリティー企画の協力先を常に開拓しています。将来は、全国の病院に設置したいと考えており、長期療養中の子どもたちが多く小児がん拠点病院や小児がん連携病院を優先して活動を展開する予定です。より多くの病院での継続的な運営を目指しています。

活動の特長

引く回数や大きさなど、各病院の意見を聞いて景品を補充

薬や注射、リハビリなどでポイントを集めたらカプセルトイを引けるポイントカード制にしたり、カプセルに番号を入れて大きな景品と交換したりと、カプセルトイの引き方は病院ごとにさまざまに工夫されています。治療に対応した目標設定や年齢分布、流行など、各病院の状況や反応を医療スタッフに細かく聞いて景品を補充しており、現場の工夫と情報交換が効果を引き出しています。



子どもが誤飲しない大きさの景品を選んでます。消しゴムや光るヨーヨー、靴下ほか、いろいろな種類があります。

気軽に楽しく参加することで、支援につながる仕組み

良かれと思う行動でも喜ばれないこともあるのが、支援側の難しさと言えます。プロジェクトサンタでは、応援する側が疲弊せず活動を続けるために「誰かのためでなく、応援する側が楽しむ」ことを大切にしています。このサンタイズムを生かした企画側にも参加者にもうれしい多彩な支援企画の創出は、チャリティーへのハードルを下げ、楽しく参加したことが誰かを助ける優しい連鎖を生んでいます。



服を買ったりカプセルトイを引けるチャリティーや、不要本の回収による支援など、多彩な支援方法を展開しています。

患児の家族も癒したいと、院内でイベントや企画を実施

病院内で、家族も楽しめるシャボン玉イベントを開催するほか、夏祭りにはカプセルトイを利用した企画で盛り上げています。また、企業から提供された化粧品を利用して、母の日に向けた企画を実施。子どもたちは、いつも付き添ってくださっているお母さんへの思いを込めて贈り物をラッピングし、手渡しました。治療をがんばる子どもの支援とともに、子どもを支える家族を癒す活動も並行して行っています。



「親子で楽しむシャボン玉遊び」のイベントでは、子どもたちとともに家族も癒され、見ている人も楽しめます。



連絡先 ●所在地：〒663-8177 兵庫県西宮市甲子園七番町22-11 ●TEL：090-7258-0347
●E-mail：office@p-santa.org ●ホームページ：https://www.p-santa.org
●代表者/担当者：矢野 舞 (理事長)

優秀賞

NPO法人 WeD【佐賀県】

高校生の「〇〇したい」を応援する事業

選考理由

地域の人たちや団体、企業との多様なつながりが、子どもたちが将来のビジョンやキャリアデザインを考えるためのきっかけをつくり、地域の次世代育成に貢献している点が評価されました。地方都市の一つのモデルケースとなることが期待されます。



活動の概要と目的

キャリアの選択肢が広がるような「きっかけ」を提供し、主体的に考え行動できる高校生を育成。

玄界灘に面する風光明媚な唐津市。唐津城、虹の松原、呼子朝市などの観光資源を有し、福岡都市圏や佐賀都市圏から多くの人を訪れる町です。一方、市内に大学がないため、若者の多くが高校卒業後に進学・就職のため市外に転出し、地元との関わりが薄くなるという課題を抱えています。唐津市の若者回帰率（10代で市外に転出し、20代で戻ってくる率）はわずか3%。子どもたちにとって「ナナメの関係」と呼べる存在と出会うことも少なく、キャリアに対するイメージが育ちにくい、やりたいことを見つけられないまま進学や就職をしてしまう生徒がたくさんいます。そこで、高校生の間に地域や大人と関わることによってキャリア観や地域への愛着を育てることが大切と考え、高校生の「〇〇したい」を応援しながら高校生の主体性を育む事業に取り組んでいます。

高校生の活動に伴走者として寄り添いながら、活動のための「場所」、きっかけとなる「機会」、地域や先駆者との「つながり」を提供。現在4チームが生まれ、約50名の高校生が活動しています。

子どもたちの変化・成長



高校生の間に学校を越えた仲間づくりが生まれ、地域の人や企業、大学生など多様なつながりによって興味・関心が広がっており、ロールモデルとなる人と出会ったり、将来やりたいことが見えてきたりという変化が見られます。ボランティアや自主的な活動を通して、自身が住む地域に貢献する活動に参加できるようになることも大きな成長といえます。



海外清掃のため、SUPを使って無人島「鳥島」に渡るReActチーム。地域のSUPインストラクターの協力を得て行っています。



鳥島で集めたゴミはビニール袋に入れ、各自のSUPにしっかり括り付けて持ち帰ります。ふるさと唐津の海を守る活動です。

参加者の声

初めて会う人とでもコミュニケーションをとることができるようになりました！これからも積極的に参加したいです。

(高校3年生)

たくさんの人と出会えて、できることが増え、いろいろな考え方を知ることができ、自分の世界が広がりました。(高校3年生)

SNS用や記録用の写真を撮っています。好きなカメラ撮影を活かせる場所ができて本当に楽しいです。(高校2年生)

高校生の頃は自分のことで精一杯でしたが、支援する側となった今は地域とのつながりを深く意識するようになりました。

(大学生スタッフ)

高校生には自分にはない視野・感受性・発想を伝えてくれて、物事にさまざまな視点があることを気づかせてくれます。(地域の大人)

大人社会の感覚で物事を進めしまうと、伝わっていないことに気づくと同時に、メンバーの多様性を感じます。(地域の大人)

今後の課題と未来の方向性

何かを生み出す活動ではないため、費用面では常に苦労しており、運営の専任スタッフがないため、広報活動、連絡調整などの事務作業も大変です。すでに「WeDを卒業した生徒を雇いたい」という地域企業が出てきています。これは最高の誉め言葉であり、一度、進学で県外に出た若者が戻ってくる受け皿になります。こういう声に応えるために事業の安定化を図りたいと考えています。

活動の特長

学校の垣根を越えて高校生同士がつどい、つながる場所

唐津市内にある8つの高校のうち4、5高校の生徒が活動に参加しています。学校の垣根を越えて高校生が集まるには、場所が必要。現在は市内の古民家を拠点とし、ミーティングや作業、セミナーを行うほか、チームの一つが町家カフェ事業で利用しています。高校生チームが会議や作業をするだけでなく、日々の自習スペースとして、学校には行けないがここには来られるという生徒の居場所として、集いの場になっています。

高校生の視野と選択肢をひろげる多様なつながり

運営面では高校生支援に詳しい認定NPO法人カタリバ、資金面では地域企業の協力を得ているほか、活動全体について慶應義塾大学・飯盛研究室の支援を得ていることが大きな強み。唐津の高校生が普通なら出会うことのない慶応の学生と活動できる意義は大きく、将来に対する視野やキャリアの選択肢が広がる機会となっており、大学生の指導を受け、慶應義塾大学や法政大学にAO入試で合格する生徒も出てきています。

ボランティア活動をきっかけにやりたいことを見つけていく

近年、就職や進学でボランティア経験を問われることが増えており、高校生たちもボランティアのきっかけを探していたりします。WeDでは、市内の全高校に定期配布するパンフレット『Stocked』にボランティア情報を掲載。参加した高校生には「ボランティア証明書」を発行します。インセンティブを設定することで参加しやすくなり、ボランティアを体験する中で地域や人との関係が生まれ、やりたいことが出てきています。



毎年3月、積極的な高校生をつくることを目的に、呉服町商店街で「まちなか文化祭」を開催するまちなかカンパニーチーム。



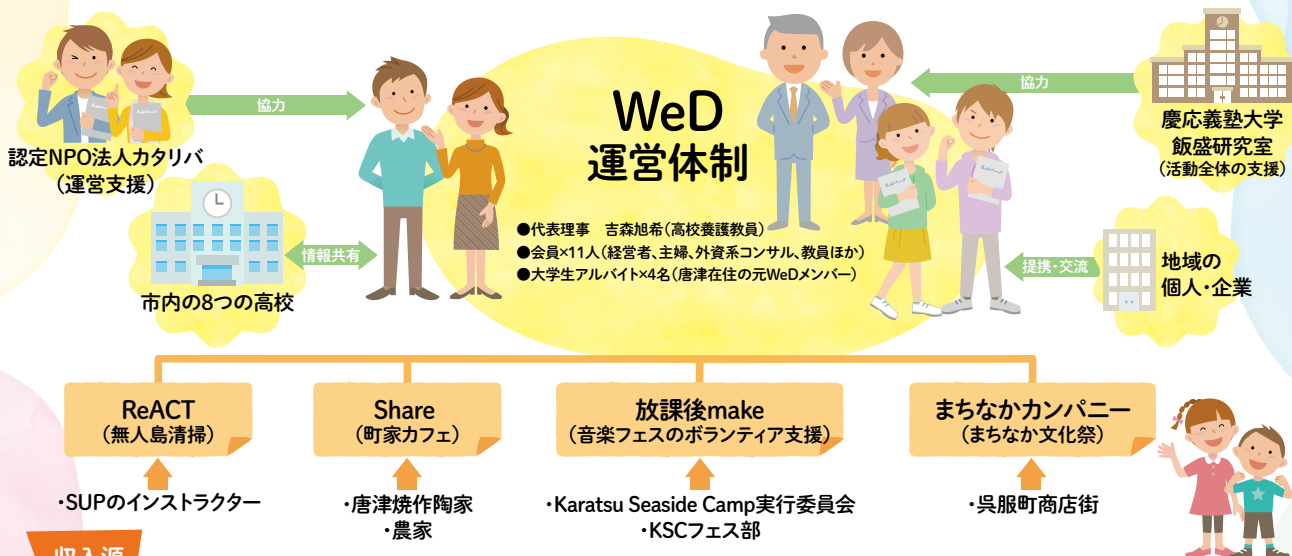
波戸岬少年の家で年2回行うWeD合宿。地域企業もゲスト参加するため、高校生と社会人がつながる場となっています。



市内の全高校に配布している定期パンフレット『Stocked』。活動を伝えるとともに、ボランティア情報を掲載し、仲間を募っています。吉森代表が年1回すべての高校を回り、活動状況と参加した生徒について報告しています。

活動の広がり

運営スタッフは、吉森代表理事（高校養護教諭）、地域の大人からなる支援会員11名、大学生スタッフ4人の計16名。大学生スタッフは高校生時代に支援を受けていたメンバーです。外部団体として、認定NPO法人カタリバ、慶應義塾大学・飯盛研究室、地域企業が活動を支えているほか、4つの高校生チームにもそれぞれ協力する個人や団体があります。年2回合宿を行っており、1回は企業が自社を若い人にアピールする発表会、もう1回は高校生の活動報告会であり、高校生と地域企業がつながる場となっています。



収入源

- ①佐賀県ふるさと納税／寄付額のうち佐賀県への手数料と返礼品や送料を差し引いた約50%が助成金として残る
- ②協賛(個人・企業)／WeD応援団制度105,000円
- ③クラウドファンディング／単発寄付(500円～)、継続寄付(毎月・毎年・キャンペーン毎)、事業(ex.七山災害ボランティア)への単発寄付

連絡先

- 所在地: 〒847-0821 佐賀県唐津市町田5-6-37 ●TEL: 0955-80-6155
- E-mail: hello@karatsu-wed.com ●ホームページ: <https://karatsu-youth-cafe.com/>
- 代表者: 吉森 旭希 (代表理事) ●担当者: 原 雄一郎 (事務局長)

特別賞

ねりま笑店街実行委員会・ねりまキッズボランティア【東京都】

練馬の街を練馬のこども達で元気にしたい!

選考理由

新聞発行やイベントなどのさまざまな活動が子ども主体で行われ、伸び伸びと楽しんでいます。今では少なくなった地元商店や住民との交流がここでは精力的に行われ、子どもたちが地域社会の大切な役割を担っている点が評価されました。

活動の概要と目的

「こんなことをやってみたい!」と芽生えた気持ちを大切に挑戦した経験が成長を後押ししています。

練馬区に住む子どもたちが「やりたい!」ことを実現させるために、祭りやイベントへの出店、新聞制作、ボランティア活動などを主体的に行っています。これらの活動は、練馬駅南口の商店街を舞台に、仕事体験や遊びができるお祭りから2015年に誕生。翌年、祭りに登場した「かわら版屋」が新聞制作につながりました。

メインで参加しているのは、小中学生約30名。活動のなかで子どもたちは、誰かに指示されるのではなく、自然とこころに芽生えた興味を実現させることで自主性や積極性が生まれ、日々大きく成長しています。さらに、活動には高校生や大学生がサポートで参加して学びや癒しの場を得ており、実行委員会は口出しや否定をせず、何気ないひと言も大切にしながら、子どもたちの興味や、やる気に寄り添っています。

子どもたちは、さまざまな個性を持つ相手とも自然に仲良くなり、「やりたい!」ことに出会い、達成する過程を繰り返しながら成長しており、伸び伸びできる居場所を見つけています。また、子どもたちから元気をもらい、街全体が活気づいています。



祭りやイベントを手作りゲームやクイズで盛り上げています。写真は、箸などで景品をつかむゲームの様子です。



新聞制作のため都立練馬城址公園を取材の様子です。取材交渉から記事作成、配布まで自分たちでやります。



定例会では話し合いや作業のほか、小学生から大学生まで一緒に外で遊びます。写真は、公園での水遊び後の一枚。

子どもたちの変化・成長

興味の幅が広がり、新しいことに挑戦する気持ちが生まれています。内気な子が誰とも話せるようになり、人前で発表もできるようになりました。自然に小さい子の世話もできています。

活動の概要と目的

街を舞台に、学校ではできなかったことができるようになり、地域の役に立つ達成感や自信が生まれています。

学校では人前で話せなかった子も新聞の取材や、会議で発表ができるように成長。新聞の取材では街のさまざまな大人と接し、人柄や生き様からも多くのことを学んでいます。メンバーには障がいを持つ子や外国籍の子、不登校の子もおり、学年や学校もバラバラですが、枠を超えてゆるくつながりながら、お互いの個性やペースを尊重しています。何より、子どもたちは活動を通して街を好きになっており、そのアイデアや行動力は地域の助けとなるとともに、街に活気を与えています。

参加者の声

元気が出るというなと思って描いたハガキの絵を、ご高齢の方に楽しんでもらえてうれしい。私も元気が出る。(小学3年生)

みんなの価値観が違うことの良さに気づき、いろいろな経験を一度に濃縮したような体験ができるところが魅力です。(中学2年生)

体験を通して自主性や積極性、思いやりを持ち、視野を広げ、人との繋がりをより大切にするようになりました(高校生ボランティア)

小さなアイデアを形にするサポートがあり、子どもたちは少しずつ自信をつけることができます。(保護者)

今後の課題と未来の方向性

障がいの有無や国籍、学校が好きか苦手かなどの状況に関係なく、多様な子どもたちがゆるやかにつながり、共に輝く居場所であり続けることを目指しています。また、培った地域のネットワークを活かし、区内全域で子どもの成長を見守ることができるよう、協力団体と一層の連携を図る予定です。将来は、成長したメンバーと一緒に団体を運営していくことを念頭に、運営面についても子どもたちの意見を取り入れていきたいと考えています。

連絡先

- 所在地: 〒176-0012 東京都練馬区豊玉(定例活動場所)
- E-mail: nerikids-bora@googlegroups.com ●ホームページ: <https://nerima-syotengai.jimdofree.com>
- 代表者/担当者: 江口 暁(委員長)

特別賞

吹田夢☆志団【大阪府】

異年齢で学び・紡ぎ・創る「感動舞台」!

選考理由

子どもたちの創造力、表現力、協働力、コミュニケーション力を育て、学校の枠を越えながらタテ・ヨコ・ナナメの関係をつくり、12年間にわたり活動を続けているところが評価されました。

活動の概要と目的

タテ・ヨコ・ナナメの人間関係から養う社会性と表現力。
社会で自己有用感を持てる次世代育成を。

大阪のベッドタウンとして発展してきた吹田市で、12年前から活動する「吹田夢☆志団」。地域と子どもたちの交流が希薄になる中、自分たちの住む町に誇りを持ち、お互いを認め合い、切磋琢磨しながら成長していくことを目的に、小学4年生から高校3年生の子どもたち30数名が演劇やダンスなどの表現活動に取り組んでいます。

異年齢で活動することでタテ・ヨコ・ナナメの人間関係を築き、さまざまな葛藤や軋轢、楽しさを学びつつ、社会性や表現力を養います。年間の活動日数は100日超。プロの協力を得て行う本格的な舞台公演をはじめ、地域の人に感謝を伝えるコンサート、日々のダンス練習、演劇ワークショップのほか、地域イベントへの参加、近隣の清掃活動など、地域と交流する多彩な活動を行っていることも特長です。子どもたちは部活や勉強と両立しながら活動に参加するため、メリハリのある時間の使い方を意識するようになります。

一人ひとりを大切に、自分が自分らしくあることを重視しており、個性と多様性を生かしながら、社会で有用感を持てる次世代の育成を目指しています。



地元ゆかりの大塩平八郎を描いた作品「天より下され候〜大塩平八郎外伝〜」は、2017年から公演を続けている舞台。



異年齢で活動するため、学校や家庭では得られない多様な人間関係の中でさまざまな気づきや学びがあります。



公演前、プロの演出家から指導を受ける練習風景。卒業生も指導者や裏方として参加し、子どもたちをサポートします。

子どもたちの変化・成長

自分の意見を言うことが恥ずかしい子どもたちも、自分ではない何かの役を借りて表現する演劇は取り組みやすく、何回も繰り返すことで表現の仕方を覚え、自分の言葉で話せるようになっていきます。

活動の概要と目的

プロの演出家や卒業生の協力を得て、多様な子どもたちが共につくるインクルーシブな舞台

年に一度の公演は、舞台監督や演出家、音響照明などプロの協力を得て本格的な舞台制作を行います。一方、普段の練習には、卒業生が指導者や裏方として参加。多くの大人と関わる中で、社会につながる学びの機会があります。また、団員の中には多様な個性を持つ子どもたちがいます。発達問題を抱えた子どもも、同じ土俵でいきいきと活躍できること。認めるだけでなく、一緒に何かをやっていくというインクルーシブな視点を大切にしています。

参加者の声

挨拶や大きい声を出すことができ
るようになって、毎日練習に行く
のがとても楽しみだ。

(小学4年生)

幅広い年齢層の人たちと本気で
舞台を作っていくのは、滅多にな
い経験だと思う。(中学3年生)

ダンスや演技がうまくなるだけで
なく、人間関係や礼儀を学べるの
でとてもいい。(高校1年生)

活動に関することは本人に管理・
決定させるようにして、親子ともに
「自主性を伸ばす」大切な場として
います。(中学1年生の保護者)

今後の課題と
未来の方向性

日々忙しい子どもたちの生活に気を配ることに加え、SNSの広がりによって、子どもたちの中にいじめや不穏な空気が生まれやすいよう注意や配慮が必要だと感じています。子どもたちが一流の人の舞台づくりを知ることがとても大切で、今後も続けていきたいと考えていますが、資金面が課題です。次世代育成という視点では、演劇やダンスをしたからその道に行くというだけでなく、ここで学んだことを自分の人生、自分の道でそれぞれ発揮してほしい。社会的なマナーを身につけて将来に生かしてほしいと考えています。

連絡先

- 所在地: 〒565-0801 大阪府吹田市青葉丘北13-1-712 ●TEL: 080-5352-4959
- E-mail: yume.hoshi2010@gmail.com ●ホームページ: <https://www.facebook.com/yume.hoshi.kokorozashi/>
- 代表者/担当者: 村上 加代 (会長)



公益財団法人 パナソニック教育財団

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階
TEL.03-5521-6100 FAX.03-5521-6200

こころを育む総合フォーラムのホームページでは
過去の受賞活動も紹介しています。

<https://www.pef.or.jp/kokoro-forum/>

こころを育む 🔍

